

探究活動と職場体験を融合し 自らの将来を描く力を育む

京都府 京都市立大宅中学校

京都市立大宅中学校では、職場体験と探究活動を関連付けて行い、学問的な視点から「働くこと」にアプローチしている。進路意欲を高めるだけでなく、ポスターセッション形式の発表によって、表現力の向上、自尊心の涵養などの成果も現れている。

家庭環境が厳しく 将来像が描けない生徒たち

京都市山科区にある中規模校の京都市立大宅中学校は、4年前から「総合的な学習の時間」（以下、総合学習）でキャリア教育に取り組み始めた。背景には、生徒の学力の低さ、進路意識や規範意識の希薄さがある。衛藤明夫校長は次のように述べる。

「この地域には家庭環境に課題を抱える生徒が多くいます。また、校区内の小学校は1校で、一度出来た人間関係を変えることは難しく、不登校となる生徒もいます。私立中学

校に進学する学力上位者も多く、公立中学校は学力面でも厳しい状況が続いています」

このような状況にある生徒が、夢を抱き、学習に前向きに取り組めるようにと、衛藤校長が着目したのが総合学習だった。

「生徒が自分で進路を決めるには、この年齢なりの将来展望や夢を持つことが重要です。働くとは何かを考え、学ぶ意欲を喚起させる、3年間のプログラムをつくりました」

3年間の流れは次の通りだ。1年生では仕事や経済への関心を深めるための講座を開き、2年生での職場体験に向けての職業調べとポスターセッション（ポスターによる発表）

School Data

◎1987（昭和62）年に勤修中学校東分校より独立、大宅中学校として開校。2009年度、経済産業省の早期工学人材育成事業の指定校となり、「総合的な学習の時間」を中心に、職業体験と工学人材の育成を推進している。



校長◎衛藤明夫先生

生徒数◎382人 学級数◎16学級（うち特別支援学級3）

所在地◎〒607-8175 京都府京都市山科区大宅山田113

TEL◎075-573-3067

URL◎<http://cms.edu.city.kyoto.jp/weblog/index.php?id=203906>

公開研究会◎未定

を行う。2年生では、京都の産業を学ぶフィールドワークと5日間の職場体験をした上で、疑問に思ったことをテーマにして調べ学習をし、ポスターセッションを行う。3年生では、企業と大学を訪問し、関心を持ったことの調べ学習とポスターセッションをした後、3年間の集大成として卒業論文を作成する。それでは具体的な活動内容を見ていこう。

◎1年生での取り組み

ファイナンス講座で 生活設計力を養う

1年生の総合学習は、基礎講座、ファイナ

主体的な進路選択——自らの意思と責任で決める力を育てる

ンス講座、職業講座が柱となる。

基礎講座では、生活の基本となる「お金」について学ぶ。班ごとにテーマを設定し、分かったことを壁新聞にまとめる。図書館やインターネットなどを活用した情報の探し方も学び、調べ学習の基礎も身に付ける。

ファイナンス講座は、基礎講座を受けて、実践的・体験的に生活設計について学ぶ。京都市教育委員会が開設する「ファイナンスパーク」を訪れ、食費や光熱費など生活に必要な費用を計算したり、商品やサービスの購入、税金の支払いなどの体験をしたりすることを通して、身近なところから人生設計について考えさせる。生徒からは「思った以上に生活にお金がかかっている」「食費が高い」などの声が上がるといふ。

そして、職業講座では、社会人から仕事のやりがいや苦労などを聞く。職業は違っても、それぞれ誇りや充実感を持って働いていることを、生徒に感じてもらおうのがねらいだ。2学年主任の森下治樹先生は次のように語る。「生徒は保護者や先輩の姿だけを見て、社会を想像しがちです。保護者の苦労などに視点を置いてしまうと、生徒は将来に行き詰まりを感じ、人生を否定的に描いてしまいがちです。多くの大人の話を聞き、人生にはさまざまな喜びややりがいがあることを感じさせ、働くことに前向きなイメージを持たせることが重要だと考えます」

●2年生での取り組み

生徒の「なぜ」を大切に 職場体験のテーマを設定

2年生では「働くこと」について探究し、そのまとめとしてポスターセッションを開き、将来の目標を膨らませていく。

まず、夏休み前後に京都の伝統産業をテーマとしたフィールドワークを行う。西陣織や京くみひもなどの伝統技術が、現代の工業製品や海外の企業にも活用されていることを学んだ後、伝統産業の現場を訪れて、どのように商品が出来るのか、人々が働いているのかを学ぶ。そして、夏休みの課題として、自分が伝統技術を生かして起業するとしたら何を考えるかを考え、商品イメージやテーマなどを図や文章で書いてまとめる「商品企画書」を作成する（P.14図1）。

次に職場体験を行い、探究活動と関連付け、働くことの意義を追究する。①事前学習で自分の訪問先の仕事に関する疑問をいくつか挙げて、②その中から訪問先で調べたいテーマを決める。③テーマについての仮説を立て、④訪問時に知るための方法や手順を考え、職場体験に臨む。テーマは、訪問先が保育園なら「子どもと触れ合っていく上で大切なことは何か」「どうやって園児を増やしているか」、飲食店であれば「なぜお持ち帰りは値引きされるのか」「お客が一番多い時間は何時頃か」



京都市立大宅中学校校長
衛藤 明夫 えとう・あきお
「教師の存在そのものが教育である」という意識を持って指導に当たっている」



京都市立大宅中学校
西本 幸史 にしもと・こうじ
研究主任、英語科担当、3学年担任。「苦境を乗り越えるために必要な考える力や発想力を生徒に育てたい」



京都市立大宅中学校
森下 治樹 もりした・はるき
保健体育科担当、2学年主任。「いつも志を持ち、自分の夢に向かって進んでいける生徒を育てたい」

などさまざままだ（P.14図2）。研究主任の西本幸史先生は次のように語る。

「調べればすぐ分かるようなテーマもありますが、テーマは出来るだけ生徒の発想を大切にしています。教師が指導しようとする、生徒は受け身になりかねません。生徒が知りたいと思うことを尊重し、主体性を引き出していきたいと思っています」

テーマをうまく設定出来ない生徒には、担任が「興味があるものは何か」「家にこういうものがあるよね」などと声を掛け、生徒からアイデアを引き出していく。教師は生徒が主体的に取り組めるような支援に徹するのである。

「以前は明確な目的がなかったため、多くの生徒は『楽しかった』『仕事は大変だと思っ

図 1

「商品企画書」

風上に立つ日の為に⁰⁰⁰!

2年生 総合的な学習の時間 ()組 ()番
名前 ()

★ **今までの学習を思い出そう!**

2年生の総合的な学習の時間では今まで京都府の(伝統)産業と(電気機械)産業について学んできましたね。今まで学んできたことをまよこめてみましょう!

Q1. 現代では、伝統産業の技術はどのように利用されていきましたか?

伝統産業	産	現在の技術
① 西陣織	着物	染織機(コンピュータ制御)で織り出す
② 京くみひも	くみひも	3Dプリンタで紐を作る
③ 金属工芸品	仏具	精密加工機で細工する

Q2. 次の京都の企業はどのような製品を販売していますか?

① 任天堂	製品	ゲーム機
② 京都セラミック	製品	セラミックタイル、セラミック部品
③ 村田製作所	製品	携帯電話、パソコン

★ **変化していく京都の伝統産業**

京都の伝統産業は、現在危機に直面している。その危機とは職人の(高齢)化と、(後継者)不足による伝統産業そのものの衰退である。このような事態を防ぐため、

若い若手職人が伝統産業の技術に最新の技術を融合させていくことが大切である。

★ **会社を起して世界を変えよう!** ~伝統技術を活かしたものを考えよう!~

師は20XX年、あなたは無事に社会人となり、大宅伝統産業ホールディングス(株)という大きな会社に入社しました。その数年後、あなたは会社で学んだ伝統産業の知識を活かして独立、様々な人の協力もあって会社を起すことができました! 「新商品で、日本の技術者を変えてやろう!」

あなたは社員たちと共に、伝統産業と現代の技術を使った新たな商品の開発を行うこととなりました!

ただ商品を考えるだけでなく、伝統産業の技術を使った商品を考えましょう! 最近の経路や不便な点とあわせてそれをテーマにしていこうと考えやすいですよ。(テーマ例: エコ など)

発想を自由に書いて、世間を驚かせよう!

商品企画書

商品名 _____

商品イメージ(輪) _____

使用した伝統産業の技術 _____

商品テーマ _____

商品説明 _____

「た」といった感想しか出てきませんでした。しかし、探究活動と結び付けることで、会社は単に働いて給料をもらうところではなく、職場では社員一人ひとりの創意工夫が必要で、アイデアがなければ充実した仕事は出来

ないということを感じた生徒も多かったようです」(西本先生)

ポスターセッションで論理的思考力を育む

商品企画書は、京都の伝統産業について学んだ後、「自分がその知識を生かし、現代技術も使った新商品をつくる」という設定で書く

* 同校の資料をそのまま掲載

職場体験が終わると、ポスターセッションに向けた準備に入る。事前に考えていた調べたテーマについて、職場体験を通して分かったこと、新たに感じた疑問などを、模造紙にまとめるのだが、生徒は担任の助言を何度も受け、論の展開や見せ方などを作り直して、完成させる。

ポスターセッションは体育館で行う(写真)。1クラス分全員のポスターを貼り、他クラスの生徒は関心のあるポスターを見に行く。生徒は自分の書いたポスターの前に立ち、考えを発表する。これをクラス順番に行う。ポスターセッション



写真 ポスターセッションの様子。生徒は研究内容をまとめたポスターを作成し、それを見に来た生徒に内容を説明する。聞く側は少人数で発表者との距離が近いので、不真面目な態度を取る生徒はいないという

図2 2年生のポスターセッションのテーマ例

- **書店**
 - 本を探しているお客さまへの気遣いは何か
 - 店の本の配置や種類とお客の引き付け方
- **スーパー**
 - 万引き対策は何か
 - 処分された商品の行き先
- **飲食店**
 - 新商品を出すタイミングについて
 - 常連客を増やすための工夫とは
- **消防署**
 - 待機の消防士は何をしているのか
 - 消防士の義務感について
- **高齢者施設**
 - お年寄りの方にイベントを楽しんでもらう工夫について
 - 介護する時の正しい接し方について

* 同校の資料から編集部で抜粋して作成

主体的な進路選択——自らの意思と責任で決める力を育てる

で重要なのは、発表の巧拙以上に、聞き手とのコミュニケーションだ。聞き手は分からないことや詳しく知りたいこと、確認したいことがあれば、発表中でも随時質問することができる。

このような、自分で調べ、論を構築し、発表する体験を通して、論理的思考力、表現力、コミュニケーション能力、聞く力を高めることが、ポスターセッションのねらいだ。

「不満があると感情的な言動で物事を処理しようとする生徒がいますが、なぜ問題になったのか、相手が何を、自分はどう思ったのか、きちんと話を整理しなければ、問題は容易に解決できません。論理的に物事を考える思考法とコミュニケーション能力の両方を鍛えたいと考えました」(衛藤校長)

ポスターセッションを始めてからは、生活態度も落ち着き、生徒同士の問題も減った。すぐに感情的になって食ってかかっていた生徒が、きちんと順序立てて考え、話を組み立てることが出来るようになってきたという。また、普段の生活においても他人の話に耳を傾けられる姿勢が身に付いてきたと、衛藤校長は感じている。

「発表を通して自分が注目された体験が自己有用感につながり、自信を持ってコミュニケーションが取れるようになったことで、自分を冷静に見つめ直す力が高まってきていると思います」

●3年生での取り組み

企業・大学訪問をし 将来像を膨らませる

3年生での総合学習は、1・2年生と積み上げてきた活動の集大成だ。柱は修学旅行を利用して行う企業・大学訪問。東京(12年は九州)の企業を班ごとに訪問し、仕事内容ややりがいなどを聞く。その後、近隣の大学を訪れ、学食で学生に交じって昼食を食べる。

「生徒に高校から大学、就職へ向かう道筋を具体的に伝えられない家庭もあるので、大学がどのようなところなのかを、生徒が少しでもイメージできるように昼食会場を大学にしました」(森下先生)

訪問後は、職場体験と同様、体験を基に「社会に役立つ物・制度・取り組み」を考え、ポスターセッションを行う(図3)。1・2年生での経験があるため、生徒は手際よく論文をまとめ、発表もしつかり出来るという。

3年間の総合学習の積み重ねにより、生徒の進路に対する意識は大きく変わった。「A高校に進んでポスターセッションを続けた」「エンジニアになるためにB工業高校に行きたい」というように、目的意識を持って進学先を選ぶ生徒が増え、志望校選びを始める時期も早くなった。また、学力面でも成果が見え始めていると、衛藤校長は話す。

「特に学力中・上位層の学力が伸びました。」

図3 3年生のポスターセッションのテーマ例

- 塩分や糖分を計る機械
- 婚姻学習奨励制度
- ナビゲーション車椅子
- 体が不自由な方でも着やすい服
- 排気ガスを減らすシステム
- 京都に新路線を増やす
- 食物を無駄にしないシステム
- 床発電について
- 飲酒運転をなくす
- 自転車での交通安全
- 地熱暖房機
- 物置型野菜栽培機
- 宇宙発電所

*同校の資料から編集部が抜粋して作成

学力下位層ではまだ数値面の変化は見られませんが、定期考査や『全国学力・学習状況調査』での無回答率が大幅に減ってきています。問題をしっかりと読み、取り組もうとする意欲は高まってきていると感じます。継続して取り組みことで、全ての生徒の学力や学習意欲を高められるのではないかと考えています」

教師にとって特に予想外だったのは、成績上位層の成長とその波及効果だ。

「正直なところ、ポスターセッションは本校の生徒には難し過ぎるのではないかと思っていました。しかし、ひとたび取り組んでみると、生徒は多方面で個性を発揮することが分かりました。まず、成績上位層が飛躍的に成長しました。自分の好きなテーマを設定できるとあって、率先して取り組み、能力を存分に発揮していったのです。その姿に刺激を受けて、周りの生徒たちも変化していききました。『私ももう少し何か考えてみよう』と自主的に工夫を始めたのです。『この子がこん

なことを考えられるんだ』という生徒がどんどん増えていきました。そして、学年全体に自主的に取り組む雰囲気広がっていったのです。改めて、全ての生徒に挑戦の場を与えることが大切だと感じました」（西本先生）

●進路指導の工夫

3年間の総合学習で生徒の夢や志に対する理解を積み重ねる

生徒の変化に応じて、教師の進路指導も変わった。以前は3年生の進路選択の時期になって初めて、普通科や総合学科などの違い、文系・理系の違いなどを教えていた。進路を決められない生徒には「○○が向いているんじゃないか」などと、教師主導で志望校を決めていくことも少なくなかったという。

「教師主導の進路指導では、教師に決められたという気持ちが強くなり、小さな不満から高校を辞めるということにもなりかねません。今は『○○高校に行きたい』という生徒に対して、『そのためにどういう準備が必要か』というところから指導が出来るようになりました。教師は情報を提供し、一緒に考えますが、最終的な決断は生徒自身が行います。自分で決めることが進学後のモチベーションにつながると思います」（西本先生）
こうした指導が出来るのは、1年生からの指導の積み上げがあると、森下先生は話す。「レポートやポスターセッションでの発表

は、生徒の夢や志の積み重ねです。担任団も生徒が3年間思い描いてきた将来像を把握していることで、面談で改めて興味・関心や適性を探っていく必要はなくなりました」

総合学習で積み上げてきた生徒把握の実績が、教師の進路指導力の向上もたらしているのである。

苦境に立たされた時にこそ前に進もうとする力を育てたい

いくら思いが強くても、何かしらの事情で諦めなければならぬこともある。それでも、生徒は前向きに高校生活を送ることが出来るのか。西本先生は次のように考えている。

「たとえ志望校に手が届かなくても、教師がカリキュラムを見せ、きちんと情報を伝えれば、『この学校でも同じような勉強が出来る』と、生徒は志望校を変えることも納得します。3年間の探究活動を通して、人生にはいろいろな道筋があり、ゴールまでの道は人それぞれであることを、生徒が理解できるようにしたからこそ、不安に陥らず、意欲的に前に進めるのだと思います」

学力ありきではなく、あくまで生徒が描く将来像や興味・関心を大事にして、高校の指導方針やカリキュラムとのマッチングを図っていくことが重要なのだ。進路決定の段階で多少道筋が変わったとしても、自分の夢に向かって進んでいるという確信さえあれば、生

徒のモチベーションが下がることはない。

「最近の生徒の傾向として、自分で考える、自分で決定する力が弱いというのはあります。しかし、それは大人がそういう機会を子どもに与えてこなかったことが大きいのではないのでしょうか。中学校の進路指導にも、成績を見て『ここくらいだろう』という指導で済ましてきた側面があることは否めません。しかしだからこそ、その反省を踏まえ、生徒が自分の頭で考え、自ら進路を選択していくように、3年かけて計画的に育てていくことが大切だと思います」（西本先生）

校長が考える進路選択力を育む工夫

高校進学は人生における重要な選択の1つですが、往々にして、それで将来の全てが決まってしまうかのように教師も生徒も思いがちです。中学時点の指導で重要なことは、将来像や目標までの道筋を自ら描き、そこに向かって努力する姿勢を身に付けさせることです。これからは知識だけでは生きていけない時代になると思います。生きていくためには、アイデアや発想が必要です。苦境に立たされた時に、どれだけ自分の頭で考え切り抜かれるか。それが出来るようになるための経験を少しでも中学校から積み重ねさせたいと考えています。